

トツカータとフリーガ

井本元義

沢木が吉野由紀子から自宅へ呼ばれたのは、いくつかの台風が過ぎてやや秋めいてきた時だった。由紀子の夫は精神科のクリニックを経営している吉野修三という沢木の古くからの友人だった。

自宅を訪れるのは二十年か三十年ぶりだったが、沢木はあえてそれを真面目に思い出して計算しようとはしなかった。由紀子と会うのも十年ぶりだった。共通の友人の葬式で出会った時、彼女の表情の変わりよう、友人の死の悲しみではないその表情、やつれにシヨックを受けていただけに、その日自宅で沢木を迎える彼女の変化に不安を感じていたからだ。四十年前も前の彼女に会えるわけではないのだ。あるがままに対処していこう、それが沢木のその日の覚悟だった。

玄関を入ると、記憶にある新築の匂いとは全く異なった、生活臭と加齢臭が混ざって襲って来て、彼は急に疲れた。

迎えに出た由紀子の眼には何の懐かしさもない、無表情の光しかなかった。それでも沢木は整えられていない髪の間から覗く、耳や頬や首の付け根を盗み見て、勝手にその眼に懐かしさを感じようとした。

自然な振る舞いをと気にしながら、やあ、お久しぶりで、という沢木に由紀子がかすかに微笑んだように見えた。生活に疲れた初老の普通の女だ、と気が緩んでしまいうさだったが、彼はあえて軽い気持ちのふりをしてそれを抑えた。ただ部屋へ案内する彼女のやや大柄な後姿の背中から腰のあたりの骨格と肉付きに昔の面影が残っており、それが沢木の胸を少し刺した。

家建てたばかりのころ何度か訪問したことがある。夫婦とその食卓を一緒に囲んだこともある。ある時、由紀子が君にこれから家に来てほしくないと言うんだ、と吉野が申し訳なさそうに沢木に言うまでは。それで吉野との友情が切れることはなかったが、沢木は深い悲しみに陥った。それには秘密を他人に知られてしまったような恥ずかしさもあった。そこから抜け出すまでには時間と努力が必要だった。それももう昔のことだ。

部屋は何も物がなかった新築のころと比べて雑然としており、体に馴染んで深くへこんだソファと大きなテレビがその中心にあった。雑誌が方々に積み重ねてあるだけで広い居間なのにピアノ以外に特別の家具はなかった。掃除も

行き届いているようには見えない。壁にはフランスの十九世紀の画家、クールベの「追われる鹿」の模写絵が濃い茶色の額で新築の時のまま掛けてあった。深い新緑の森を鹿が逃げて来ている様子が描かれている。吉野は絵の話になるといつもこれを持ち出すほど好きだった。その後はクールベの参加したパリコンミュニョンの話になったものだった。しかしその話もうしばらくはしていない。

白く乾いた土の記憶しかない庭は雑草と雑木に覆われていた。その中で白萩がまるで噴水のように盛り上がって咲いていた。沢木が新築の時に贈ったものだった。それから時折りその花の話をすることもあった。

軒下を藤の蔓が少し覆い奇妙な細長い実がいくつもぶらさがっている。いつか何かのエッセイで、藤の実が音を立ててはじけ、ガラスを強く打った、というような話を讀んだことがある。彼は今日の前でそれを起こるのではないかと目を凝らした。なにかの気分の変化を期待したからだったが何も起こらなかつた。それよりもいつか吉野修三が話したことが思い出されて気分はまた沈んだ。ある朝その藤の棚に蛇の抜け殻が垂れ下がっていたということだった。そのままにしていたら小鳥が来て啄んでいつの間にか無くなっていたと。

由紀子は修三より十歳ほど下だったからもう五十も半ばすぎだろう。やつれ方は歳のせいばかりではないが、それ

でもちゃんと化粧などで整えればまだ美しさは残っているように沢木には思われた。由紀子の表情には悲しみよりもあきらめのようなものが占めていた。それは静かなものだった。そうしないように決めていたのに、いつか知らずに彼は昔の由紀子の美しさの名残を探そうとしていた。

話の内容はほぼ推測していたが、今の時点でどうしたらいいか、彼にはまったく考えがまとめられなかつた。

吉野修三が福島へ行くといつて家を出てから、もう三か月以上たつているということだった。しばしば彼は学会や旅に出かけたが二週間を超えたことはなかつた。沢木が吉野に連絡をして一緒に昼食をしたりするのも一、二か月に一度くらいだったから、クリニックの事務員から聞いた時間も少しの心配はあったが深くは考えていなかつた。

二年ほど前から吉野が度々福島に行くのを沢木は彼からいつも聞いていた。原発反対の集会の参加であることはわかつていたが、その運動に昔からあまりかかわっていない沢木に吉野は深く説明も誘いもしなかつた。それにもう歳も七十歳に近くなつて、四十年も前のようなエネルギーと力を發揮する中心人物として期待を得られるはずの状況でもなかつた。

ただ沢木がある時インターネット上で一つのニュースを見た時にそれは納得できた。吉野が学生時代から深くかわつていたグループが福島に運動の拠点としての診療所を作

るということで警察が注目しているということだった。吉野にそのことを伝えると、へー早いと言うだけの簡単な反応で終わった。被ばく線量の身体検査と住民の精神的なケアが主な仕事だと吉野は説明した。

また、「原発事故と命の絆を考える」という小冊子を吉野からもらったことはある。地元の元国鉄の労働組合での講演だった。自分が精神科の医者として、差別された社会的弱者と向き合っていることが使命だという主張から、放射能を心配して生きねばならない人々、巨大な社会機構に抑圧された人々、そこで生きていかねばならない人々と、われわれはどう向き合って一緒に生きていかねばならないか。具体的な経験を交えた講演は好評だったということだった。沢木にも内容はよく理解できた。

ただ、三か月も連絡がないと言うことは、事件に巻き込まれたか、表に出せないかなりの事情か、あるいは意識してこの状況を作っているかだろう。それでも吉野が出発する前に、もし三か月以上たつて支障をきたすことがあったら、沢木に相談するようにと言いつ残していた、と由紀子から聞いた時、沢木は幾分安心した。こうなることの予想か準備をしていたのだろう。命にかかわるような問題ではなさそうだ。

診療所を閉じたいのですが、と由紀子は言った。
当然患者は今はいないし、それでも一人しかいない事務

員と看護師が交代で診療所の留守番をしている。診療報酬の収入や家賃や事務員看護師の給与、薬やそのほかの支払いがどうなっているか由紀子が知っているわけではない。代わりの医者を臨時に雇ってしばらく続けると言う発想はないのか。診療所を閉じるにあたっては役所にどうやって手続きをするのか。その前に吉野が了承するかどうか。勝手に由紀子の一存だけで決めて、それをそのまま自分が実行していいものなのか。また沢木は自分の部屋からここまで一時間以上かかることや、これからの自分の仕事、冬にかけての大学の講義や入試の準備などを思っ一瞬嫌な気がしたが、頼られていることは悪い気でもなかったし、この町に来る別の理由もあった。閉めるにあたってのおおまかな計画を簡単に頭の中で把握すると、そう難しそうでもなかった。

もうクリニックを始めて、三十五年くらいになりますかね、と沢木が聞いたのに由紀子は、さあ忘れたわ、と答えました。もうちょっと待ちませんか、に彼女はそうね、としか言わなかった。福島診療所へ確かめてみます、それからまた考えましょう、と言って沢木は辞した。書齋を見せてください、と頼むの言いそびれたまま。由紀子は部屋の出入り口まで見送ったが玄関までは来なかった。沢木は福島診療所へ電話をしなればと思っただが、それが急に怖いことに思われて、そのうちにと考えて自分を安心させた。

外は小雨が降っていた。その冷たさは冬の惨めな寒さを思
いださせて沢木の気持ちをもた沈ませた。

沢木は野本という男を思い出した。吉野の高校の後輩で、
もう何十年も吉野の弟分として彼の生活のそばにその位置
を占めていた。年齢よりは随分若くがっしりしていた。吉
野を崇拜しているというのか「僕は吉野先生の用心棒とし
て・・・。」というのが彼の口癖だった。ちよつとした使
い走りから、多分他人には洩らせない何かの事柄でもおそ
らく身を挺して働いていたことだろう。

吉野には人を引き付けるなにか知らない魅力があった。
痩せぎすな体形だったが、身長はその日に会う者の気分で
高くも低くも見えた。大した用事がなくても彼を訪れる者
は多かった。彼はまた誰でも優しく受け入れた。患者には
それは大きな救いであった。一人一人の患者にとつて吉野
は自分だけの医者だった。吉野にさらに深く自分の心を開
き見せることがその生きる証であるかのようにだった。吉野
も真剣にそれを受け入れたがそれは医者としての義務以上
に情がこもっているように見えた。沢木も時たま彼に会う
ことで、安らぎというか日々の雑事の中でちよつとした刺
激を受けた。会つての帰りには自分の人生を俯瞰してみる
癖がついて、その時々で悲観的にもなり楽観的にもなった。
短時間でも日に一度はクリニクに顔を出す野本に沢木

は会うことも多かった。それも長い付き合いになり、沢木
は吉野の過去の事やその時々の問題を野本から聞くのだつ
た。吉野が決して直接には沢木に話さないと思われること
もあった。

野本は近くで社員が三、四人の小さな医科機材の会社を
経営していた。吉野がクリニクを開業するにあたって野
本はその会社を近くに作つた。しかしクリニクだけでは
商売にならないので近くの医院を瞬く間にお客として開拓
した。表面ではできない様々な便宜を請け負うことで小さ
な開業医から重宝され商売をしているようだった。

沢木は吉野由紀子から頼まれた仕事をすると、こ
の野本に一働きしてもらわねばならないと思つた。自分が
まとめの指示をするだけで彼がやりこなしてくれるだろう、
彼は喜んで手伝ってくれるに違いない。

日々の雑事に追われて沢木がクリニクの様子を見に来
たのは一ヶ月経つてからだつた。事務員とも久しぶりだつ
た。沢木を見ると安心して近頃の状況を話した。不安を訴
えてきた患者も月とともにいなくなり、他は何の問題もな
かつた。その場から由紀子にその不在を願ひながら電話を
したが、さいわい留守だった。福島の診療所への電話もし
ていなかったし、何の情報も得ていないし方策も考えてい
なかつた。

野本に会うのが目的だった。会社の出入り口のガラスの引き戸を開けるとそこは倉庫兼事務室だった。天井の蛍光灯がやけに明るく、熱のこもった狭い部屋だった。ディスプレイの注射器や注射針の箱が積んであり、奥の棚には奇妙な金属の器具がぶら下っている。木製の机がカタログや書類に埋もれてばらばらに置いてある。野本は奥から笑顔で出てきた。いつも彼を見ると沢木はいい気持になった。クリニックの女の子から聞いていました、やあ教授、いつみえるかと待っていました、彼は手を差し伸べてきた。最初の頃、学生に教えるのが仕事だと言ったことがあったので、沢木を教授と呼ぶようになった。

どこかでコーヒーでもと言って野本が案内したのは、昔はよく見かけた、豆電球の点滅する安っぽい装飾の看板の「純喫茶」だった。この町はかつては工業地帯の中心の町であったが今はすたれてしまっている。このような店が残っているのも珍しい。ほかに客はいない。コーヒーも大して旨くない。

今日は時間があるからゆっくり相談したい、と沢木が切り出すと野本も内容は察していて、僕も待っていました、と答えた。

「奥さんが診療所を閉めたいと言うんでしょう、僕は反対ですがね。だれか代わりでも見つければいいですよ、僕が探してもいいですが。あるいはそっくり誰かに貸すとい

う手もある。家賃だけ払って、しばらく休院してもいい、大した家賃でもないし。でも奥さんがまだ捜索願を出していないのは、何か事情を知っているのは間違いないから、やはりそれもありかな。」

確かにアーケードを抜けた街のはずれに診療所はあり、二階建ての雑居ビルでかなり古い。人通りも少ない。そこで三十五年が過ぎたのだ。そしてもう長い間、隣室は空いたままだ。

「第一に先生が帰ってきた時はどうするのですか。確かに連絡がないのは心配だが、昔もこんなことはありましたよ。四十年以上も前のことです。まだ先生がインタンのころの何とか闘争で、教授の論文盗作問題とか、何とか制度反対とか、図書館占拠事件とか、覚えている人も少なくとも、政治問題もやっただけでしょうかね、革命という言葉なども聞いたことがあります。デモ隊が暴れて交番が焼き打ちされたこともありましたね。先生はそこまで急進派ではなかったけれど、結局地下に潜ったということなのかな。最後は逮捕されていたということでしたがね。半年後、平気な顔で帰ってきましたよ。まさか今頃逮捕されることもないだろうけど、それだけのこともやっていないはずですが。いや、それもありうるかな。それでも連絡くらいあるはずだし。まさか今頃の中国でなかるうに。教授、あるとすればあとは福島の運動の中で知り合った誰か女性のこと

ろへ転がり込んでいる、うん、ありうる。まあ、診療所を閉めて片づけるのは簡単ですよ、その時は僕に任せて下さい、だからもうちよつと待ちましようよ。それにしても僕にくらい、こつそり連絡があつてもいいはずなのにな。いやそのうちにあると思う。」

楽天的な野本の言葉に沢木は一つ気になつていたことがあつたが、口に出さないままだつた。何日か前に見たテレビの内容がまさかと思ひながら気がかりになつて消えなかつた。

ニュースは一つの不思議な出来事を告げていた。アメリカのある都市に一人の六十代の男が立つてゐる。身なりもきちんとして旅行鞆を持つてゐる。言葉も正確で動作にも何のぎこちなさもない。所持金は十分にある。レストランの支払いにもなんの不都合もない。しかしそのホテルに宿泊しようとしたときに、彼は自分がどこからきて何をしてゐるのか全く分からないと言ふことだつた。当然自分の名前も住所も分からない。

テレビの解説者が喋つていた。これは精神統合失調症の一つの病状です。解離性遁走と言ひます。社会的地位もあり仕事も立派にこなしている人にも起こります。戦争中の恐怖や重圧や、事故とかで頭を強く打つ外的要因や、重い病気が原因であることもあります。普通の生活でも起こりうる。心の奥にたまつた深いストレスが、意識しないま

ま蓄積され、ある時これも意識しないまま遁走と言ふ形で静かに起こる。情動的な苦痛からの脱出、抑鬱の回避、新しい未知なるものへの解放の希望、そして放浪、突然だがごく自然に。そのあと回帰しても日々の不快感、羞恥、自殺願望、そして攻撃的衝動も起こります。

沢木にはまさか吉野がそんなことになつてゐると思われなかつたが、そうでないと言ふ根拠はまかつたくなかつた。日ごろの付き合いから吉野にそれほどのストレスがあるとは思われない。医者自身の彼に病気のイメージはない。何かの外的要因からとすれば考えられないこともない。もしそうであればどこで見つかつて、テレビが放映するはずだ。

野本は喋り続けていた。のんきな男だと、沢木はちよつと嫌な気がしたが本人はまかつたたく気にしてゐない。

「あの頃、世間では内ゲバと言つていましたが、対抗するR派と鉄パイプで殴り合つていましたね。片輪になつたり、死んだのもいた。先生は身を隠していましたが、僕が用心棒でいつも傍にいました。あのころ先生は裁判を抱えていましたから、その日は出かけなければならぬ。裁判所の前でR派から襲われた仲間もいましたから。僕も裁判の日は緊張しましたね。送り迎えも車の追跡がないかどうか確かめて。まあ僕がいたからよかつたかもしれませんがね。先生は毎日牛乳を飲んでいましたよ。そんなに牛乳が好き

ですかと聞くと、ストレスで胃に穴が開く、これはそれを予防するためだつて、そうなんですかね。僕にはけつこう楽しい時代だつたけど、いや待てよ、いまごろ内ゲバで殺されたまま、行方不明ということも。いやそんなことはない。いやいやそんなことは。」

野本も喋っているうちに心配になつて来たようだった。頬が薄赤くなり目じりが少し濡れている。

「そう言えば、福島診療所の周りを最近私服警官がうろうろしているとも言っていましたね。先生が覚えている顔がいるつて。このあたりでも最近見かける顔らしい。彼らは、変な言い方だけど、堂々と私服をやっていますからね。診療所の前の老夫婦のやっている小さなラーメン屋が、この頃はお客さんが増えて、この前など警察の方々が沢山見えて、とも喜んで言っていたと。先生、笑ってましたけど。診療所ははやっているのかな。一度来いと言われましたが、時間が取れなくてね。昔ほど物騒でないと思つてましたから。一度でも一緒に行くつとくんだったな。」

福島の診療所へ行ってきましようか、と野本が切り出すのではないかと沢木は期待したが、彼は自分だけの想像に入り込んでいく。

「向こうの診療所もこっちみたいなものかな。先生は人気があるから。また沢山の患者さんたちに頼られて忙しいのでしようね。そういえばこの前、道端で患者のKさんに会

いましたよ。教授さんも知っているでしょう。ふらふらしながら、眼の焦点も合わないような顔で哀願されました、早くクリニックを開けてくれつて。そして誰と誰は強制入院させられているらしいなどと。僕に言われても困るんですがね。」

クリニックがオープンしてからの三十数年が沢木の頭をよぎつた。開業にあたつて吉野がこの町を決めたのは、街の中心から少し離れた古い二階建ての雑居ビルの家賃が安いからと言う理由だけではないようだった。患者が来院しやすいようになど、彼の方針で患者には様々な配慮がなされていた。八畳ほどのフロアーには周りに不釣り合いな贅沢な皮のソファアールがおかれ、横には畳の待合室もあった。深々としたソファアールに何時間も満足げに座っている者や、畳部屋で黙々と弁当をたべる者。母親に連れられた不安げな少女や青年。声は大きいが必要のない話を繰り返す者。精神が不安定ということで職を失い閉じこもっている者。口を開くことも忘れたようなみすぼらしい中年の女性や身づくろいのしつかりした女性も。患者は大抵が大人しい貧しそうな人たちだった。彼らは決まった日に通院してきて、院長に話を聞いてもらい薬を貰つて帰っていく。院長の優しさに触れて安心する。抱擁されたような名残で静かな残りの日々を送る。不安を抱いて毎日を送っているものもソ

フアーにはゆっくり落ち着いて座っていることができた。そこは居心地のいい空間であり、生活のよりどころとしての柱だった。

年ごとに廃れていくこの街は、今は過去の面影がわずかに残っているだけだった。いくつもの地場の会社や商店は閉じられ人々の仕事がなくなる。そこではいわゆる社会的弱者が増えてくる。吉野はそれらの弱者の味方として、この古びた街で小さなクリニックを選んだのだろうか。それに満足しているのだろうか。野本と知り合ったばかりの頃、吉野がかつて激しい反体制運動の闘士であったことを彼から聞いて、沢木は少しは納得したものだ。ただ引退した闘士の静かな仕事だろうか、社会の底辺の弱者への力を生涯の仕事と決心しているのか。もしかして活動の黒幕としての隠れ家では、とふと思わないでもなかった。

患者の数は年々増え続け、沢木が月に一度ほどクリニックを訪れて、診察の合間に話をしたりするのも遠慮せざるを得ないほどだった。吉野の空き時間待つ間に、患者たちにも顔見知りが出来、昼の待合で彼らと将棋をしたりすることもあった。親しくなった患者たちは沢木をやはり、教授さん、と呼んだ。

たまにしか訪れない沢木にも時とともにクリニックの動きがわかってきた。希望者だけではあるが、毎週火曜日は近くの丘の散歩、木曜日はソフトボールかテニス。そのあ

とはみんなで銭湯へ行く。月に一回の俳句会は定期的に小冊子に印刷され配布された。春には弁当を持って花見に出かけ、俳句を作った。言葉が五七五に合い、句が活字になると誰も満足だった。

沢木は患者たちの笑顔に会うようになった。教授さん、教授さん、と呼びかけられることも多くなった。しかし相変わらず職を得てクリニックを卒業するものは少なかった。診察が終わっても帰らない者もいた。お茶を何杯もお変わりしながら、一日中クリニックで時間をつぶす者もいた。彼らにとつてはクリニックに来る事だけが日々の大切な行事になっていった。底辺と言われるところでもそれなりに日常を送っている。生活保護の申請や往診なども吉野の仕事だった。そして長い時間じつと話を聞いてやった。貧しくて弱いものに彼は優しくかった。夜間の呼び出しは何時ものことだった。彼らを支えている吉野は先生、先生、と慕われ頼られて忙しさは増すばかりだった。

自殺者が出るのが吉野には一番つらいことだった。自分の力不足を嘆くのではなく、死の寸前の彼らの悲しみ絶望を想像すると耐えられなかった。うつ病や幻覚の中で死んでいくものばかりではなかった。沢木は一度落ち込んでいた吉野から話を聞いたことがある。

「幻聴で悩んでいるという青年と話したことがある。幻聴が止まるかもしれないからやってみようかとある薬を提案

した。彼は受け入れてくれて、二ヶ月ほどしたら幻聴は消えた。しかし消えた途端に彼は元気を失った。数か月後彼は自殺した。ショックだった。回復しているのになぜ死ななくちやならないのか。彼にはある女性の声が幻聴としてずっと入っていたのだ。彼にとつては、その声は病気の象徴であり、片方では心の支えにもなっていた。幻聴が消えた今、それからの彼には空白しかない。病気は良くなったはずだ。だが彼は先に何を見るのか。何を見て生きるのか。答えが出ない。そして僕には何ができるのか。彼にその将来に何を見させることが出来るのか。遺書は残していない、僕への恨みなど言わない。その時僕は医者として仕事を続ける自信を失くしかけた。どこかへ逃げて消えて行きたい気持ちだった。」

そんな日々で三十年以上も経ったのだ。沢木の心について吉野に対する尊敬の念が大きく育っていった。それについて沢木は吉野のふつと呟く、疲れた、と言う言葉や頬がこけていくやつれをも敏感に感じた。彼のほかの交友などは知らなかったし、医師会や学会でも異端児であろうことは推測できた。何か手伝おうかと思うこともあったが、何ができるわけでもなかった。時々一緒に食事をして好きな読書の話題でお互いに安らぎを得るくらいでいいのか、とも思ったりした。

年に一度の患者の作品発表会と年末のお祭りは大切な行事だった。近くのホールを借りて絵、写真、詩などを展示し、またギターを弾きながら歌い、詩を朗読する者もいた。患者の家族は嬉しそうに参加した。そこでも野本が準備に奔走した。沢木が感心する作品も少なくはなかった。親しくなった患者も増えた。

ケンちゃんという若い患者はいつも母親と一緒に、絵が上手だった。葉っぱや野菜、果物、花が得意だった。一度その絵を褒めるとそれ以来、親愛をこめて沢木を、教授さん、と呼びはじめた。沢木もケンちゃんと呼んだ。母親も笑顔をやさなかつた。幼い頃いじめに会った彼は母親に励まされて強くなるうと体を鍛えた。筋肉は鍛えたが気が弱くかえって外出は少なくなつた。時折外に出ても、何かのきっかけで怒りが爆発するともう誰も手が付けられなかつた。ただ怒りは自分より弱そうなもののみに向けられた。暴れながら彼はいつも泣いていた。一度クリニックに来て吉野に気持ちを打ち明けて以来、そこが唯一の安らかな場所になつた。

タミさんはまだ中年と言うには早すぎる美しい女性だった。少女の頃暴行されたトラウマから抜けだせないまま、いくつもの男女関係や宗教問題で疲れ、氣力を失くしていた。部屋に籠つても閉所は嫌だが、人の多いところも嫌いだつた。気にかかることが消えないと騒ぎ喚いて、ある

時クリニクへ連れてこられた。しゃくりあげて泣き通しだった。何がそんなに悲しいのかわからなかったが、まわりでもらい泣きするものがあるほどだったらしい。今は週に一度来院して薬を貰う落ち着いた生活を続けていた。短い美しい恋の詩を書いていて吉野に見せ、たまには沢木にも見せたりした。

年末の「なるサー」祭りは一大イベントだった。安いホテルだったがホールを借り切つてのお祭りだった。立食パーティーに患者たちはいい服を着て集まった。吉野も正装していた。百名ほどだったろうか、患者の家族も時には市の施設の役人も参加した。何人かがスピーチをした。患者には様々な感謝状が与えられた。一年間の山登りを続けた人、クリニクの掃除をしてくれた人、就職できた人、などなど。吉野は参加者の前で各人を讃えた。みんなは恥ずかしそうにしていたが、にこやかで食欲も旺盛だった。ケンちゃんにはネクタイ姿だったし、タミさんのお洒落はセンスがあつた。最後は「なるサー踊り」で締めくくられた。院長のほか数名が壇上に上がり上半身裸になって踊った。吉野の瘦せた裸は浅黒くどの患者よりも貧弱だったが、長い腕は頭上で生き生きとくねった。普段の院長からは想像もできなかつたが、患者はそれぞれが院長の秘密を自分だけがつかんだような親しみを持ったにちがいない。何とかなるサー、明日はいい日になるサー。なるサー、なるサー。野

本はそこでも活躍した。ケンちゃんに誘われて沢木も裸で踊った。ケンちゃんは筋肉を自慢し、ついでに沢木の体も褒めた。よー、教授さん、と声もかかった。沢木は目頭が熱くなった。

ある年の野本の挨拶を沢木はいつまでも覚えていて。彼の話は上手だった。

「みなさん、私は少年のころから吉野院長の友人でした。それも用心棒です。先生をずっと守ってきました。それで大人になるまで付き合ってきた女性をみんな知っています。いつも裏切られ捨てられていました。そして裏切った女性もいます。みんな知っています。院長、院長、先生、先生と言われていますが本当はとても弱い人間です。それも知っています。先生はみなさんに支えられて毎日を送っています。みなさんが支えて、先生はやつとここにいます。そしてたしかに先生は医者です。患者さんの病気を治します。しかし、エイ、治れ、と言って治るものではありません。この薬で治る、手術をすればいい、と言うことはありません。皆さん一人一人が持っている病気にどう対応するか、患者さんだけでなく先生も一緒に向き合っていく、そしていつか退治していく。先生はいつもみんなと一緒にいます、歩みます。これからもよろしく。」

それで三十五年が過ぎたのだ。人生の半分以上と言つていい。入退院を繰り返す者、クリニクに来なくなつたも

の、自殺したものの、病死の者、もう長い間通っているもの、何千人もが吉野の前を通り過ぎていった。患者は心を開いて吉野を受け入れ、もっと深くと招き入れ、自分だけの特別の待遇を彼に求める。吉野はその訪問が終わるとまたつぎの患者の中を覗きに行かねばならない。孤軍奮闘だった。救いを求める患者たちとの戦いでもあった。あるいは彼らを皆の中に匿い重圧をかけてくる社会との戦いでもあった。昔、江戸時代などはこんな人たちも、村人や近所の人たちに食事を貰ったりして、平穩に暮らしていたものだったよ、と沢木は吉野から聞いたことがある。自分は患者とともにその病氣に向き合い、ともに日々を進んでいかねばならない。希望に満ちた明日ではないけれど、と。

沢木は自分の個人的な生活にしか興味を持たない性格だったが、次第に吉野に感化され尊敬の念は増していった。それにつれて心配も増えていった。吉野は時折り、疲れたと呟いた。最近では診察日も減らし、予約制にした。患者の数も一頃に比べると減った。沢木の気のせいかな、吉野の頬が痩せ顔色も少し黒くなったようだった。

沢木は女子大学でフランス語を教えていた。教授という肩書を貰ってはいたがそれほどの学問の実績はなかった。気が付くと長い時間だけが経っていた。真剣に学問に取り組むほどの学生のいない大学であったので、授業の準備に

はそう苦労しなかった。なるべく全員に及第点を与えるようにした。好きな本を読み、フランスから取り寄せた雑誌を読み、時々頼まれて通訳をし、音楽を楽しみ、酒を飲んだ。新聞や雑誌に雑文を書き、何かの機会に喋った。年に二回、彼が学生の母親を招待してありふれたフランス詩人の生涯とその詩を紹介するわかりやすい講義は評判がよかった。数年に一度学生を連れての研修旅行ではたまにはフランスもあった。

平凡な生活だったが、風のない湖水の表面にさざ波が立つように、何かの前兆が心の中に起こってくるのを感じることがあった。これが己の人生なのか、このままずっと続いて行く人生なのか。さざ波が何を象徴しているかはわからなかった。いつか意識も失って灼熱の中へ飛び込んでいく何かの衝動にかられるのか、闇の一点に集中して吸い込まれじつと耐えながら消えていく自分を欲するのか。どちらにも激しい理由のない怒りのようなものが伴っていた。ただそうした心のさざ波が起こりそうになると彼は無意識のうちにそれを避け通常の生活に戻ろうとした。日々の生活ではなるべく気にかかるものは避けていた。そのため結婚の時期と言われる時代もいつの間にか過ぎた。しかしこの平穩な生活もいつまで続くかわからなかった。大学の理事長が、先生お歳はお幾つになられましたか、と言ってきた時が退職の勧めだった。老後をどう独りで過ごすかま

だ考えてもいなかった。

沢木は三十歳のころ三年間をパリで過ごした。日本の大学院を出ても仕事はなかった。帰国する予定の先輩がその部屋を紹介してくれた。パリ大学に聴講生として登録した。八階の狭い屋根裏部屋だったがその部屋は満足のいくものだった。天窓と床の間の隙間のマットがベッドだった。雨の時は天窓から漏れるしずくが顔におちて目覚めた。冬の寒い時は、部屋には小さなヒーターあったが、天窓のガラスが凍り付いていた。夜中に共同トイレに降りていきたくない時はワインの空き瓶が代わりだった。夏は濡れタオルを、すぐにぬるくなつたが、頭からかぶった。天気がいい時は窓のすぐそばの「聖廟」の後ろから昇る朝日が美しかった。夕陽が家々の屋根や教会のガラスを照らした。夜はライトアップされた遠くの丘の上の寺院が見えた。

学位は持っていたので勉強に焦ることはなかった。会話にもすぐ慣れた。友人たちとのパーティーではよく飲みよく喋った。誰もが日本人に優しかった。映画や散歩で孤独も楽しんだ。何時間もカフェに座って通行人を眺めてもあきることにはなかった。

ある日曜日の夕方、散歩の途中に雨に降られて傍の教会に駆け込んだ。教会では日曜日の夕方のミサでパイプオルガンの演奏がある。丁度良かったと思つて入ると、大勢の

人が座席に座っている。特別の演奏会のようにだった。荘厳な音が教会の石の壁に響き渡り、聴衆の頭を重苦しく押さえつけ、深淵に引きずり込む。バツハの「トッカータとフーガ」だった。沢木は学生の頃この音楽を大学近くの喫茶店でよくリクエストしたものだ。古いステレオ装置から流れる音の世界は、その先の荘厳さを想像させた。深い神聖な闇の世界に沈んでいくのもその音の先の想像だった。しかし何か不満足だった。だが今は違う、これはまさに本物だ。曲は深い地底から突然に噴き上がり、地上のものすべてのもに襲いかかり、引きずり込もうとする。必死で逃げようとするが、さらに追いかけてくる。身体を遠慮なく刺し震わせ、残酷なほどに食い込んでくる。そして身体を引き裂き粉末にして深淵にちりばめる。身体と心はきらめきながら霧のように深い闇に沈んでいく。もはや人間はこの音楽の前では頭を上げることはできない。これは神にささげる音楽ではない。神は深淵のはるか奥底にある。奈落である。その一点にすべては吸収される。人間の悲劇、悲しみはそこで永遠に癒される。

様々な想念に浸つて沢木は感動の時間を終えた。演奏が終わつてふと気が付くと隣に日本人の夫婦がいた。軽い挨拶を交わすとそれが吉野夫妻だった。

それから彼らの部屋に度々招待されるようになった。吉野の周りには日本人があまりいなかったせいもあつたらう。

沢木はいつも次の招待が待ち遠しかった。部屋は街の中心の大通りから入った閑静で瀟洒な建物にあった。三部屋あるうちの居間にはピアノが置かれていた。据え付けの家具は古い光沢を放っていた。ベランダには街路樹の枝が垂れ、緑色のカーテンになり、また鏡に映っていた。木の床は固くても靴の音は柔らかかった。開け放したガラス戸からは気持ちのいい風がいつも流れ込んできた。夕方から夜風に変わるとその香りも増した。由紀子の手料理のおかげで沢木は日本料理の渴望が癒された。ワインは沢木が普段口にする味と全く違うまろみがあった。

吉野は精神科の医者だった。沢木がなぜ精神科なのか尋ねると最初は、家内の親が精神科病院を経営しているものだからと答えていたが、思い直したのか持論を展開した。「精神病院と言うでしょう、なぜ精神科病院ではないのか、内科の病院、外科の病院というでしょう、それが最初の疑問でした。そしてほとんどが閉鎖病棟です。それをだれも病気だと思っていない。病気は治るのにです。社会はその人が社会的に変なことをするかどうか、を問うだけです。その振る舞いがおかしいと判断されれば、閉鎖病棟行きです。夜勤のアルバイトで随分ひどいところを見ました。強制入院させられた若者が自分は患者じゃない、病気はもう治ったんだ、とわめていました。看護師が数人で彼を殴っていました。彼は最初は哀願していましたがかなわぬと

みて反撃しました。彼らの思うつぼでした。患者はさらに激しく殴られ翌日には死んでいました。日本はいつからこんなことになったのか。明治時代に精神衛生法というのが制定されてからです。いわゆる座敷牢を法定化したようなものです。あと何回かは改正されましたが、にたようなものなんですよ。」

それから話は政治の問題にもなったが、沢木があまり関心を持たないようなので話は文学の話に移っていった。

吉野は文学、とくに詩については造詣が深かった。ある日古い通りを歩いていて、ヴェルレーヌここに死ぬ、と言うブラクのある家を見つけた時は嬉しかったと話した。一階は、レストランヴェルレーヌ。その全集を買ってますます好きになった。フランス語はそんなに難しくない。彼がランボーをピストルで撃って、刑務所に入れられ、そこで悔悟した話。その後再び彼はある美少年と知り合って、田舎に家を買って一緒に住んでいたが、美少年はすぐに病気で死ぬ。自分はその家を小旅行で前日行つて見てきた。晩年はアルクールに溺れ惨めに死んだが、その葬儀には多くの詩人が集まって彼を讃えた。

話は尽きなかった。沢木も喋った。自分の専門が十五世紀のフランスのヴィヨンという詩人であること。名門の出身でソルボンヌ大学を卒業しながら、無頼の仲間たちと交流を続けついに小役人を殺す。何度も刑務所に入り、絞首

刑の寸前に恩赦で助かり、また売春宿を転々とし窃盗団に加わり、無頼を繰り返しながらいつしか人知れず消えて行った謎の詩人。その翻訳を一度出版したこともあったが、評判はさしてよくなかった。

またいくつかの雑文を発表したので、一応はヴィヨンの専門家としての名前だけは知る人もいた。

吉野の話はしなかったが、沢木は自分の若い頃の無頼経歴をヴィヨンの中に見ていたように思っていた。激しい喧嘩で相手を傷つけ逃げたことは何度もあった。血だらけの相手がその後どうなったか知らない。死んだかもしれないとふと思つて、汗をかいて目覚めたのはもう何年も経つてからだったが、それが彼のヴィヨン研究のきっかけだった。才能に恵まれながら彼は何故その世界でしか生きられなかったのか。「往古のフランソア・ヴィヨンは威風堂々と酒場から酒場へと飲み歩いては略奪を行い、そこには群衆の歓呼の声の雑踏と、風塵のような狂える華麗な街の殺戮とがあった」ある著名な研究者の文章は沢木の心を震わせた。強盗に押し入る前夜の酒盛り。欲望に迷わされた夜毎の狂乱。歴史の古い残酷な絵本を見るようだった。彼はヴィヨンに憧れ実際にはありえないだろうがその生活を夢見た。そして怒りと悲しみと皮肉に満ちた詩。絞首刑を宣告された彼の詩は沢木の心に浸み込んだ。沢木がパリでの住まいを決める時もヴィヨンの縄張りであったS・J通りを選んだの

は当然だった。

そんな世界と縁のないような吉野の生活は沢木には羨ましくもあったが、妬む気持ちにはならなかった。美しい妻と優雅な生活と勉強は吉野にぴったりだった。帰国してからも保証は十分だ。この友情を長く大切にしなければならぬと思うだけだった。

沢木は一人息子だったが、弁護士になりきれずに司法書士となった父親から厳しく教育された。高成績をあげて弁護士にならねばならなかった。圧迫に耐えきれず、ある日彼は父親を殴つて家を出て不良グループに入った。無頼の荒れた生活でも文学部には入学できた。母親が陰で金銭面の応援をしてくれた。それは今でも続いている。沢木が吉野にはそれらのことを話すことはなかった。

沢木は頻繁に彼らを訪れるようになった。おいしい食事や気の合う話。また食後の由紀子のピアノは沢木の楽しみだった。沢木は次第にそれに惹かれるようになっていった。それが訪問したい気持ちさをさらに助長した。素晴らしい演奏だった。しかし沢木は演奏する彼女の背中と腰と手の艶やかな動きに魅入られて、次第に曲が聴こえなくなっていくようになった。一曲弾き終わると彼女はいつも数秒うつむいたままだった。乱れた髪から覗くうなじは白かった。そのうなじから沢木は彼女の表情を想像するようになった。

沢木はその美しさに耐えられないと思った。聴こえなかった曲も次の招待まで消えることはない。彼は音楽があまりわからないという不器用さをなぜか二人の前で装っていないければならなかった。

一通りのパリの街を知ってしまうと、何時間も公園やカフェで過ごすことが一番の楽しみになった。公園で見る空は夕方になって陽が落ちかかった時が一番美しかった。空の青さが薄暗くなるにつれてますます透き通って来るのだ。ベンチで本を読み、昼寝をし、ウォークマンで音楽を繰り返し聴いた。シヨパンのノクターンとプレリユードだった。由紀子の得意とする曲だった。

カフェでは通行人を眺めながらビールとワインを何杯も飲んだ。退屈ではなかった。もの憂さに身を任せると少しは心地よかった。学生街のそのカフェの前の石畳を、いろんな人種の若者が歩いて行った。一步一步の靴音が心に突き刺さった。彼は何か知らない拭い去れない哀しみが心の奥底に残っているのを感じていた。それを苛立ちだと思いつつも抑えていた。それを抑えつけておかねばならない。今日はこれで終わりだと立ち上がって部屋に帰っても空しいだけだ。かといってこのままじっと座っていても何の変化もない。心地よかった空気が乾燥したまま周りに張り付いているだけだ。

通りの突き当りの公園の先に陽が沈もうとしていた。その時ふと背後を女性が通り過ぎる気配を感じて彼は振り向こうとした。だが彼はそれを抑えた。なつかしい空気の香りだった。由紀子だと思った。髪の間から覗く白いうなじと、肩の線、背中、腰の骨格が一瞬に蘇った。それは彼にとっては最後通告のようなものだった。数秒後彼は思い切った振り向いた。しかしそれは由紀子ではなかったが、その瞬間に彼は解き放たれたように確信した。俺は彼女に恋をしている、その身体にその存在すべてに。もうそれを抑えることはできなかつた。忘れ去ることはできなかつた。彼は喜びよりも甘い悲しみに陥った。

吉野から三週間も招待がないと、沢木の胸は苦しくなつた。嫌われて拒否されているのではないかと不安になった。夜、天窓の真下のマットに横になったまま彼は身動きできなかつた。天窓から欠けた月が見えた。沢木は自分より整った体つきの吉野が、由紀子を抱き服を脱がせている場面を想像した。なされるままに従う由紀子の姿態を思うと胸が締め付けられた。人の妻を自分はどうすることもできない。吉野の形のいい唇が彼女のうなじを這う時の由紀子の表情は、沢木を虚脱させ深い悲しみだけを残した。どうしようもない。嫉妬という言葉では表せない辛い空しさだけが冷たく身体を刺した。乾ききつた喉の奥にいきなり塩辛

い水分が送った。

五月の天気の良い日の夕方だった。沢木は吉野の部屋のベルを押した。愚かで醜いと思った。しかし悲しみは愚劣さでしか癒されないので、と彼は自分で勝手に納得した。ちよつと近くまで来たので、しばらく彼には会っていないし、と彼は眼をそらしながらも精いっぱい冷静さを装って挨拶を交わした。由紀子は部屋へ案内してくれた。沢木はその後姿全部を決して忘れないように目に焼き付けようと思った。由紀子がビールかコーヒーかと聞いてきて、彼は水をお願いしますと答えた。それ以外は咽喉を通りそうになかった。

吉野は昨晩は帰ってこなかったということだった。最近教授の地方講演に同行したり、パリでも仲間内の議論で長引いて帰らないことも多い。疲れているようだが気持ちは高揚している。教授はアメリカでの著書の発売と講演で成功を取って帰国したばかりだった。由紀子は淡々と話した。

何時になるかわかりませんが、お待ちになりますか、と問われて帰らねばならないのかと一瞬思ったが、彼はもう覚悟は決めていた。厚かましく口を開いた。

「一曲お願いできませんか。」

「何を弾きましょうか。」

「ゴルドベルグ変奏曲のアリア。」

「難しいのをご存じなのね。」

「ええ欲望を抑えつけたような単調な哀しみが感じられませう。それが好きです。」

夕方の最後の光に映えて街路樹の花が眼についた。薄紫の小さな靄のように枝にかかっている。桐の花だ。曲がはじまると陽は急に落ちた。彼は曲を聴きながら美しく優しく揺れる姿を凝視しそれから眼を閉じた。彼女の演奏姿を見なくても眼底に浮き上がらせることが出来るかどうかためそうとした。単調の澄んだ音を奏でる腕は、深海を泳ぐ白い魚のようである。それは悲しみに満ちて小刻みに震えている。その美しさはまわりをただ拒否している。薄闇の中でも白いブラウスを透して彼女の身体が見える。一瞬彼は氣を失ったように眠りに落ちた。彼女の息の匂いを感じそうになった。衣擦れとその空氣の微かな流れにも彼は匂いを感じた。それ以上は耐えられなかった。

重苦しい曲が半分も終わらないうちに彼は早々に辞した。挨拶もちゃんとしないうちだった。急に悲しくなった。甘い憧れが自分を拒否する前に、自らすべてを拒否しなければならぬ、と彼は石段に足を踏み出した時にそう思った。どうしようもないことはどうしようもないのだ。自分の動作や周りがすべて空疎だった。手足の動きに力が感じられなかった。すべてが無駄で虚しい。死と言う言葉が一瞬ひらめいた。窓を見上げるともうカーテンが閉められ、薄い

光がわずかに漏れていた。桐の花がくるくる舞いながら落ちてきていた。気が付けば数秒おきにポトリポトリと落ちてくる。拾ってみると萼から離れた円錐形の一個の花のままである。

その夕方の刹那を沢木は長い間決して忘れることはなかった。繰り返し思い出しては何度も同じことを考えた。あの時無理にでも手首を握って引き寄せ、せめて首筋にでも唇を押し当てるのが出来ていたら、決してそれ以上のことを望んでいるわけではない。しかし間違ひなく彼女は侮蔑の激しい平手打ちを返しただろう。それはそれでよかったのだ。それから年毎に記憶が遠くなるにつれ、むしろ想像は勝手に広がった。無頼漢詩人ヴィヨンが勝手に彼の想念に入り込んできた。精悍で凶暴で淫靡な笑いを絶やさないう憧れの男。俺は恥を抑えきれないまま、彼のような凶暴な男に変貌すべきだったろうか。しかしそこにはピアノを弾く由紀子の白い項と肩と背中肉が清楚な仄暗い光で漂っていた。彼それを見つめることで変貌することを拒否し、静かに悲しみに浸ることを決心していた。

久しぶりに会ったのは吉野が帰国する一ヶ月前だった。彼らは外で飲んだ。吉野の表情は興奮した後の虚脱状態に似ていた。

酒が深まると彼は古い悔悟を話すようになった。彼の師、H・M教授が日本を訪れたのは彼がフランスへ来る五年ほ

ど前だった。彼はそのころ地方都市の公立の精神科病院に勤めていた。設備も整った一級の病院だった。近くには女囚の刑務所があった。すでに著作で名を成していたH・M教授はそこを訪れた。閉塞された環境や抑圧された個人の意識などから歴史を分析する、逆にその歴史から抑圧された個人はどう生きざるを得ないか。女囚刑務所は世界に稀に見る環境だと教授の賞賛を得た。

彼はついでに吉野が勤めている病院を訪問した。フランス語を少し話す吉野が接待役にあてられた。彼はまる三日間付きつきりだった。吉野はまたH・M教授の著作をよく読んで共鳴していた。不安定な発作を起こす者をすぐに入院させるのが当時の治療だった。特に患者が社会的弱者であれば強制入院は誰も異存がなかった。吉野はH・M教授の持論を引用してそれらに反対した。彼の論文に、古い医者とは、大抵が裕福な医者たちだったが、またあの「アカのやつら」が、と非難していた。

数年たつて彼はある少年を担当した。中学でいじめにあった彼は次第に両親へ暴力をふるうようになった。高校も中退し部屋に閉じ籠ってゲーム機をいじっていたが暴力は収まらなかつた。初めは厳しかった父親も暴力には負けるようになった。親がある時町医者に相談した。町医者はすぐに強制入院の手続きを取った。病院内で少年は最初は暴れたが次第におとなしくなった。しばらくして吉野は両親

と少年と看護師と一緒に面談した。少年は素直に詫び、両親は泣いて喜んだ。強制入院がよかったのかどうか吉野に疑問が残ったままだった。

退院の直後少年は牛刀を手に入れ、長距離バスを乗っ取った。女性が一人殺され数名が怪我をした。警官たちの強行突入で少年は逮捕された。テレビでも中継された。少年は病院では嘘をついておとなしく猫をかぶっていたと言った。両親を決して許さない、復讐するためだと繰り返した。吉野に批判が集中した。凶暴な奴は閉じ込めておくべきだ。それを見抜けないのは医者として失格だ。吉野に反論はできたが、実際に女性が殺されていた。反論はさらに非難を呼ぶだけだった。遺族が病院を告訴してきた。

吉野はその病院を辞めた。フランスへ渡りH・M教授のもとで一年ほど勉強することにした。由紀子の父親が資金を援助した。その父親もまた、あの「アカ」が、とののしる医者の一ではあった。

最後に招待された吉野の帰国前の食事は静かに終わった。会話は少なかったが、吉野はしきりに沢木の恋人について尋ねた。沢木には恋人らしき女性がいるにはいた。大人しい銀行員の娘だった。帰国したら結婚してもいいと思って相手も両親も待っていた。次の春にはこちらに旅行で来ることになっている、まだ婚約はしていない、式を挙げる時

は招待するからな。それだけでその話は終わった。

沢木はお疲れでしょうからと言って、最後のピアノも断った。もう由紀子の姿は眼底に焼き付いていた。匂いや空気の流れは胸の奥からいつでも流れてきた。一個の物体として彼の中に生きている。彼は必死でそう思い込もうとした。そして決して手が届くものではない。触れ得る者ではない。これが不条理なのだ、彼はそう自分を皮肉った。納得しなければならなかった。帰りに二人と握手した。顔を見ることはできなかった。由紀子の手を握るのは初めてだった。沢木の体を心地よい甘い悲しい衝撃が走った。

あれから四十年も経ってまだその時の事を鮮明に覚えている。意識を失くすほど酒を飲んで彼は北駅の近くの怪しげな地域に足を踏み入れた。初めての経験だった。危険を恐れる気持ちは全くなかった。むしろ危険を欲した。危険な男でも出てきたら俺は戦い間違ひなくその男を殺す。酒で痺れた感覚にも悪臭と安香水の匂いが満ちていた。それが心地よかった。手持ちの金は使ってしまった。少しの満足にもならなかった。砂のような肉体への無味乾燥の一瞬だった。寒かった。空しさと怒りしか残らなかった。

暗い石畳を歩きながら、愚劣だ、生きていることは愚劣だ、おれは愚劣の塊だと呟くように考えた。何をもつても埋めることのできない空虚を内包した俺は一個の愚劣の塊だ。あと二年自分はパリで過ごす。淡々とした生活を続け

るだけだ。もうこれからはどんな女も愛することはできないだろう。決して甘い憧れのようなものを感じてはいけないのだ。一切を拒否する。俺は石のように生きる、愚劣な一個の塊としてただ生きる。

部屋へ帰って彼はその銀行員の娘に手紙を書いた。帰国しても会わない。理由のない簡単なものだった。

由紀子の相談を受けてからも沢木はまだ真剣に考えていなかった。思い出に浸って流れるままを見ていたに過ぎない。吉野が、三か月たったら沢木に相談すること、と言いつたこと、そして今の状況は何を意味しているのか、自分は何をすべきか決めなければならぬ。その必要があれば彼を救わねばならない。また眼底に焼き付いている由紀子の面影を再び眼前に呼び戻さねばならない。それが幻であつても。

沢木は吉野とは共通の話題で何時間も話して飽きなかったが、その付き合ひの中で何か欠落している感じは拭えなかった。自分のことはよく理解してくれていると思うものの、彼のことはもう一つ踏み込めないでいた。それは吉野の生い立ち、青少年時代を知りたいと思う反面、触れてはいけない柔らかな暗い領域を感じざるを得なかったからだった。幼い頃、炭鉱町で育ち電気技師だった父が事故で死んで以来苦しい生活を送ってきたこと、その炭鉱町の病

院の院長に育てられたこと、一度吉野が恥ずかしそうに話したことがあった。院長のあと取り息子も吉野の同級で医学部に入ったが、今はその病院はない。成績優秀だった吉野と幼馴染の院長の娘が結ばれるのは流れとして不自然ではなかった。

よくある話で沢木は別段気にもしなかった。炭鉱町で育つた吉野が学生運動に身を投じるのは何ら不思議ではない。そして正義感だけでなく持ち前の優しさで社会の底辺の弱者に気持ちを寄せるのもうなずける。医者としての仕事ぶりは誇りあるものだ。確かに沢木がそこに魅かれたのは間違いない。

だが信念のために日々を送りながらも、何かが自分の足をすくい泥沼に引きずり込もうとしている不安を無意識のうちに感じていたのではないだろうか。沢木もそれを感じ吉野の明るさを心配した。確実な生活を送りながら、突然ある時すべてを捨てて破滅の淵へ自らを投げ込んでいく、沢木はある時あえてその吉野を想像した。なぜそうするのか、そうせざるを得ないのか。

沢木はある衝動を忘れることが出来ない。クリニックの経営が軌道に乗って、吉野の表情も柔和になっていた頃だった。彼への尊敬の念も増していた。市の福祉課や保健所の職員もしばしば訪れて来た。沢木はなぜか吉野に似合わないと思つた。その時襲ってきた衝動はなんだつたのだから

うか。沢木には苦悩に歪んだ吉野の顔が浮かんできた。それは吉野にふさわしかった。破滅、と言う言葉が閃いた。沢木はそれを期待している自分を感じて驚いた。恐怖に似た空気が胸を撫でて行つた。沢木は忘れようとした。

「なるサー祭り」の時期になった。由紀子に頼まれてからも二か月が過ぎていた。沢木はまだ診療所閉鎖の実行する決心がつかなかった。それよりも先に「なるサー祭り」に参加していた元患者や毎年の参加者には院長の不在と祭りの中止を知らせなくてはならない。それを口実に沢木は久しぶりにその駅に降り立った。由紀子にも会いたかった。静かな懐かしさを味わいたかった。電話の応答はなかった。沢木は幾分ほっとしながら野本に電話をした。彼は喜んで出てきた。二人だけで、何とかなるサー、で飲みましようか、と相変わらずにこやかだった。

さびれていく商店街だったが、ジングルベルが鳴り、まばらではあったが照明が色とりどりに点滅すると、それなりに精いっぱい飲みが溢れていた。大学でも女子学生たちが様々な企画をして沢木を招待することがあったが、僕はクリスマスチャンじゃないから、いつも断るのだった。音楽は心地よく懐かしいものだった。だが彼には遠い昔の懐かしい悲しみが付き纏つて他人と浮かれる気持ちにはなれなかった。

パリのシャンゼリゼの並木は紫と白の霧のような照明に飾られ、十二月いっぱい続く。帰国する前年のクリスマスは忘れることができなかった。一キロも続くその静かで美しい並木の照明はなぜこんなに悲しいのか。パリを去りたくないという気持ちと帰国すればまた懐かしいけれど、由紀子に会わねばならない。その畏れと、苦悩が想像される涙でぼやけるイルミネーションが彼の脳裏を去来するのだった。

野本は風邪気味だと言いつつよく飲み食った。接待の女性をからかい落ち着いていなかった。沢木は野本が何か隠しているのではないかと思った。やつと野本が喋り始めたのは時間も相当経つてからだった。

「実はこの前は簡単に言いましたが、この一、二年、私服警官がしつこくなりましてね、震災以降です、それもおおびつらにね、昔はそれでも誰もわからないうちに現れて消えてたのに、と先生が言っていました。この前なんか、僕の会社にも来ました。クリニックに覚せい剤患者らしきものはいないかって。先生のことを調べに来たんですよ。ひやつとしました。実は時々夕方方になってから、青白い顔をした若い者が会社に来ることがあるんです。ポンプくささといって。可哀そうで時々売ってやります。飲み屋のママみたいな女性がタクシーで乗り付けて大学の先生の名刺を見せて注射器をたくさん買っていったこともありますよ。

そうだ、私服は名刺も置いて行きましたよ。樽田とかいつてました。この前はケンちゃんも質問されたらしいです。私服と知らず、ケンちゃんが先生は福島だ、と答えたと報告した時、先生に随分叱られたそうです。ケンちゃん、しよげてましたが。先生と出かける時、教えられたこともありません。後ろを見てみる、あれだ。やっぱり、私服の樽田でしたよ。そして先生が不思議なことを言ったこともあったな。あいつはおれの学生時代からの担当だって、そんなに何十年もやるのですかね。何の意味があるんですかね。ついこの前もいましたよ。」

沢木はその反体制運動のことについて、吉野から真面目に話を聞いたり、考えを求められることはあまりなかった。同調者として安心しているのであったろうが、寂しいことでもあった。まして私服のことなど沢木はまったく知らなかった。

別れ際になって野本が言った。二人とも酔っていた。

「今日は体調があまりよくない。今までこんなことはなかったんですがね。クリニツクは年が明けてから取り掛かりましょう。僕もちよつと疲れました。大切そうな書類だけは選んで、あとは「何でも屋」に全部任せましょう。一日で終わりですよ。それで先生ともお別れかな。五十年の付き合いもあつという間ですね。昔のことを昨日のように覚えてる、これがいけないですな。五十年前のことが昨日

だったら、その五十年はなんだったのでしょね。先生がいなくなる前に言つてました。高校一年の時におふくろに買ってもらった白いスポーツシューズがいまだに懐かしく思う。それが一番の思い出だつて、あのころは貧しかったのにつて。こうやつて人間はあつという間に五十年、七十年、そして死んでいくんですね。」

沢木はこれが終わったら多分君と会うことはないだろう。そしてお互いにごどこかで死んでそのまま、今日は何か自分の知らないことを話してくれと頼んだ。自分の三十五年の推移とも並べてみたかった。

この三十五年の成り行きはそう変わったことではなかった。吉野がパリへ行くとき由紀子は親に相談もせずに行行した。いづれ病院を継いでくれるならと義理の父、院長は譲歩した。帰国してから吉野は猶予を貰っていたが、その院長も死んだ。吉野は跡を継がなかった。病院は売却された。彼にはどうでもいいことだった。

「先生のクリニツクの三十五年は一瞬のような感じですね。空しく哀しいですね。これで終わりですかね。ただね、教授、僕も歳のせいとか時々変なことを考えるのですよ。先生、何か人に言えない病気じゃないかって。疲れたと言うことが多くなつてきていました。体の芯に何か異常があるような気がしましたね。教授も気付いていたんでしょ。随分瘦せてきた。冗談で、先生エイズでも貰つて来たんじゃないやな

いですか、と言ったことがあるんです。先生、笑いもせず否定もせず、聞こえないような顔をしていましたがねまさかエイズではないでしょうが、どこかで何かの病気の治療をしている、そんなことも考えられますね。僕たちに言いたくなくて。まさか外国ってことはないでしょうね。」

沢木は一瞬でも野本の話信じたのが嫌だった。半分信じかけてあわてて否定したからだった。確かに十年ほど前、吉野の師のH・M教授がエイズで死んだというニュースを聞いたことはある。だが二人はその話をしたことはなかった。今、野本の話からどこか外国の衛生状態の悪い病院でじつと死を待っている吉野を想像して沢木はぞつとした。

また昔読んだトーマス・マンの小説を思いだす。主人公の天才作曲家アドレアンは芸術の不毛と孤立を乗り越えようとして長い苦悩の末、娼婦からの病毒感染によって靈感を得るといふ「悪魔との契約」をする。悪魔との長い会話が続く。やがて彼は狂い自滅する。何とも不可解な小説だった。それほど深い残酷な苦しみが人間にあるのか。そして沢木はなぜそれを思い出したのか、自分でもわからなかったのですぐに忘れようとした。

「実はずつと迷っていたのです。教授に隠してたんですが、今日はいいい機会だ。もう三十五年、いや四十年も前になるかな、先生が僕に持ってきたものがあるんです。これは小説だ、おれが生きているうちは陽の目を見ない。誰にも見

せるな。死んでも十年は出さな。人それぞれに秘密はあるものですね。それ以来、これについて先生はなんにも言わない。先生も忘れていくかも知れない、うん確かに。これを教授、あなたに渡します。僕はこうしていますが、最近では体調も良くない。借金も増えて、いつ首をくくるか分からない。これが何か事があつていい加減なところに捨てられても困る。僕もこの頃、少し疲れましてね。年金の出る歳にもなつたし、もし診療所を片づけるなら、終わつたら僕も引退して家内の里にでも帰ります。先生の奥さんも別れるつもりでしょう。」

中年を過ぎてからどちらが先に死ぬかな、という冗談は普通だった。沢木は体には自信があつたがこれから何があるかわからない、それにそんな重たいものを預かりたくないという気がしたが、読んでみたいという気持ちを抑えきれなかった。吉野がこのまま姿を見せなかつたら、それは許されるだろう。だが今はまだ読む気にはなれない。何かのきっかけがなければ読むことはない。それは多分、自分に大きな衝撃を与えるものだろう。あるいは自分が何かに打ちのめされて立ち上がれなくなった時に読むべきものだろう。野本は紙の紐で括られた茶封筒を靴から出した。封筒は風化して端から破れて崩れそうだった。中を見せないまま、別の紙袋に丁寧にそれを包んで野本はすぐに帰った。

吉野が帰国して二年後に沢木も帰国した。吉野はクリニツクを開業したばかりだった。パリでの贅沢な生活から見て、仕事場をこの煤けた街を選んだ吉野の気持ちに沢木には最初は解からなかった。由紀子もよく承知したものだ、義父からの資金援助は十分にあるだろうに、が疑問だった。義父の病院をそのまま受け継いで経営するのを断ったからだろう。それでも吉野の気持ちを理解するのに時間はかからなかった。すぐ後に彼は自宅を建てた。

由紀子との再会はその新築の家だった。由紀子は変わっていた。というより、沢木が変わったという方が正確だったろう。涼しい風の吹き抜けるパリの部屋の華やかな由紀子ではなかった。普段着を着て沢木に忙しそうにお茶を入れる姿だった。二年ぶりに見る日本、そこに立っている現実が、まだ彼には実感としてない時だったからだろうか。由紀子へのあの熱い思いは消えたが、鬱積された哀しい欲求はその傷跡として残っていた。そして彼女はいまだに沢木にとつては拭い去ることのできない対象だった。目の前にいる由紀子が仮の映像でも、それへの情念は深く残っている。ますます沢木の心に突き刺さる。いくら欲しても、彼女を抱きその肌に触れることはできない。それをはつきりと認識しているからこそその存在そのもの、姿そのものは眼底に石のように居座っている。その対象への情念は心の奥底で冷たく燃えている。沢木はそれを大切にしようとしていた。

何度か訪問して食事をしたが、昔のようにピアノは弾いてくれなかった。沢木も頼まなかった。落ち着かない由紀子の前でパリの思い出も文学論もはずまなかった。

由紀子がある時沢木の訪問を断った。それを告げる吉野に気を使わせまいと沢木は平静を装った。沢木は由紀子が彼の心の中の煩悶を知ったに違いないと確信した。それは一種の欲びだったが、現実としては辛く悲しいことだった。沢木は丁度その頃大学の職が決まったばかりだった。さまざまな用件を確実にこなして日々を送っていた。時には意味もないような雑事にも熱中した。それが悲しみを忘れることだった。時間がかかったが彼はそれを克服した。そしてその癖は抜けないまま彼のスタイルになった。クリニツクへ行くと吉野は何もなかったように歓迎してくれた。

いつの頃からだったろうか、それが習慣になったのは、その界限に足を踏み入れるようになったのは。ある時、吉野と簡単な夕食をとって別れた後、沢木はその風俗街を散歩することにした。意識はしていたが、気づかぬふりをして自然に足がその界限へ向うままにまかせていた。

その路地一杯にはバランスの悪い原色のネオンがけたたましい音楽とともに氾濫している。ネクタイはしているがだらしない若者が客引きをしている。沢木は何も選ばずた

だ眼についた入り口へ入った。うす暗いフロアーに週刊誌ののったテールブルが一つ、椅子が五、六個おいてあり労働者風の男が二人雑誌を見ている。石鹸の匂いが不安を取り除いてくれた。誰か指名は、と訊ねる事務的な男にいやと首を振るとそのまま二階へ案内され、蒸し暑い蒸気と香水の匂う部屋に入れられた。化粧をしているがみすばらしい女がいた。初めてだった。

あれは由紀子が彼の訪問を拒否した日の帰りだったろうか。それとも大学の仕事にも少し慣れた頃、授業の終わりに女子学生が一斉に立ち上がる時にむせるような化粧臭と体臭が彼を襲った時だったろうか。それはもう三十年も前のことになる。

沢木には昔のような悲痛な気持ちはなかった。由紀子にいつか拒否されるであろうことはある程度覚悟はしていたのだ。深層の心の闇では、むしろそれを望んでいたのではないか。由紀子は偶像であり、仮の現象であった。絶対に己のものにすることのできない対象だった。だからこそ彼はさらに欲することができた。それは悲しみや絶望でもなく、沼の底の泥濘のような安らぎであり、安心感であった。今この蒸気の満ちた部屋で、女の肌に触れる時、一瞬由紀子の匂い、雰囲気が見え。しかしそれは彼女への欲望というより、何かへの哀しい希求だった。

界限は時とともに推移した。世の中の景気に連れて光の

溢れ方は変わった。薄暗く音楽も静かに、あるいはさらに激しく流れる時もあった。顔見知りの客引きも女も変わって行った。たまたま三度ほど会った女に、お金を貯めたら国に帰って小料理屋をしたい、あなた独身でしよう、一緒に来ない、と言われたこともあった。沢木は数秒間それを想像して楽しんだ。誰に知られることもなかった。

クリニクに来ることはここに來ることと同意語だった。それが三十年以上続いたのだ。夏は界限全体が蒸されたように暑く、異臭も漂った。春の夜風には下品なネオンも懐かしく見えた。冬の夜風は風呂上りに体に冷く淋しかった。時には怒りのように激しい性を求めたこともあった、諦めのように静かな時も、また素性も知らない女に限りない優しさを覚えたことも。次々に異なる肉体が彼の胸の上を通り過ぎて行った。そしてことごとく過去の闇に消えて行った。反省や悔悟と居直りを交互に覚えた。愚劣な秘密、と惨めさに陥りそうになると、それは意識して避けた。もう忘れてしまったが、昔はなにかに憧れを抱いたこともあったような気もする。激しく希求したことも。そんな新鮮な気持ちの時もあったと自分を慰めた。しかし時は流れて行った。ある時、なじみの客引きに、よう、ご老体、と冗談で声を掛けられた時は不敵な面構えを意識して、彼にニヤリと笑みを返した。ここで俺は三十五年という時間と肉体の一部を費やしたのだ。

吉野の原稿を持つてこの界限に来るのは少し気が引けたがすぐに居直った。人には言えない愚劣さ卑屈さ俗っぽさに浸るのが沢木には一種の安心感だった。それで貴重な原稿を手に行っていることが今ふさわしいようにも思えた。ただ失くさないようにコートのポケットにしつかりとねじ込んだ。

懐かしい場所だった。帰つて来たと思うことすらあった。慣れてしまった石鹸の匂いと暖かい湯気、毎回変わる女の肌と安香水。様々な肉の感触も同時代の女から娘に近い感触になつて行つた。ここに来るのも最近では義務のように思われることもあった。そして安心することが出来た。音楽やネオンはいつも煩わしかった。

受付の小さな窓口に見慣れた顔があつた。あ、教授さんと声をかけられても恥ずかしさはなかつた。ケンちゃんのお母さんの仕事場だった。ケンちゃんは元気ですか、と聞いたがすぐに返事はなかつた。しばらくはケンちゃんに会つていない。覗き込むと暗い声が帰つてきた。「死んだよ。」

沢木はお母さんの仕事が終わるのを待つて話を聞いた。

それは半年くらい前のことだった。ケンちゃんはある日クリニックへ行くためにバスに乗った。降り際に小銭がな

かつた。一万札におつりは出なかつた。謝るケンちゃんに運転手は舌打ちを返した。侮辱されたケンちゃんはシートベルトで動けない運転手を殴つた。殴つていううちにさらに怒りが増してきた。乗客は誰も止めなかつた。運転手はドアを開け警笛を鳴らし続けた。そこを通りかかつた男がケンちゃんを止め引きずりおろした。ケンちゃんは暴れたら止まらなかつた。男はケンちゃんを投げ飛ばし地面に押しさえつけた。首筋を膝で押さえつけられ手は背中へねじ上げられた。ケンちゃんの顔には砂が食い込みこめかみからは血が滲んだ。ケンちゃんは痛い泣いていた。男は止めなかつた。男はクリニックを偵察に来た私服の樽田だった。偶然だった。やつとケンちゃんが必要の力で男をはねのけて逃げたが、クリニックの前まで来たときにまたつかまつた。揉み合っているうちに入り口のガラスが割れ、今度は男が倒れた。男は動かなくなつた。周りの者が男をクリニックへ運んだ。ショックで心臓が止まっている、と院長が言った。AED除細動器が当てられた。院長は注射を打ちマッサージを続けた。ケンちゃんの興奮は収まらなかつた。ケンちゃんは泣きながら繰り返し叫んでいた。先生、こいつを殺してくれ、生かさないでください、お願いです、先生、なんでそいつを助けるんですか、先生。救急車が来て男が連れて行かれてもケンちゃんは泣き止まなかつた。先生、どうしてですか、あいつは悪い奴です、スパイです、

先生。吉野は院長室に入つて鍵をかけた。ケンちゃんは泣きながらいつまでもドアを叩き続けた。

それで終わればそれでよかつたのだ。ケンちゃんの興奮が収まるのに時間がかかつて何とかなつただろう。吉野は母親と一緒にバス会社に謝りに行つた。その一週間後のことだつた。ケンちゃんが久しぶりにクリニクへ顔を出した。受付で少し恥ずかしそうにしていたのも束の間だつた。また偶然に樽田が入つてきた。菓子箱を風呂敷に包んでいる。ケンちゃんの顔色が変わつたのを誰もが見た。そして少しづつ後ずさりしながら出ていくのに気付かないふりをした。男はケンちゃんを無視していた。樽田は長々と吉野に喋つたらしい。

「先日は本当にありがとうございます。先生は命の恩人です。救急隊の方に言われました。先生がいなかつたら多分命はなかつただろうと。まだ死にたくありませんから。まさかあそこで私を助けなくておこうと思つたわけではないでしょうね。先生と私は本当に縁がある。二人だけの縁もある。もう何十年になりますかね。私もおかげさまで警察を辞めてからもいろいろ使つてもらつています。これからもよろしく。先生とは長くやつていけそうだ。ところで私の家内ですが、ひどい鬱病です。今度診てやつてくれませんか。先生だつたら安心だ、評判もいい。」

樽田はしばしば来院するようになった。クリニクへ来

る従来の患者は次第に減つていった。院長は樽田を断つたが、彼は愛想笑いをしながらまた来た。ケンちゃんはもう姿を見せなかつた。患者が誰も来ない日もあつた。そんな日は院長は一日中部屋に閉じ籠つていた。そしてケンちゃんは三か月後に自殺した。患者の死であれほど泣いた先生を始めて見た、と誰もが言つていた。沢木は吉野の苦悩が想像できた。いたたまれなかつた。

ケンも三十五になつたばかりでした。なにもなくなつてしまつて、こんなものですかね、仕方がないです。ケンちゃんの母親は落ち着いて話してくれた。

いつものホテルは満室だつた。何軒か探したがなかなか見つからなかつた。湯上りで寒くなつてきた。何軒も回るうちに滑稽さ、惨めさが消えて自信に似たものが湧いてきた。だれもこんな自分を知らないだろう。もし学生と会つても俺とは気づかないだろう。しかしなんといつつまらないことをしているのか。まさに愚劣だ。誰もこんな愚劣な俺を知らないだろう。先刻は腹が減つたという女の頼みでラーメンの出前をとつたのだつた。湯気の中のラーメンは空腹に浸みた。今日初めて会う、学生だと言つた女。干からびていく俺の肉体は醜いか。

日頃は期末テストでも全員を合格させるためになるべく易しい問題を出す、カンニングも許す優しい教官だ。学生

には少しでもフランス語を齧ったという記憶さえ残っていればいい。彼女らはまだ若い。誰もがまだ将来の希望や楽しみをなんの疑いもなく持っている。それが虚しいものだとやがて知るだろうが、それも未来の意味だ。だが愚劣の俺には未来はない。老残と死に向かつて愚劣に生きるだけだ。ならばもつと愚劣に生きていかねばならない。情熱をもってそこに集中していくべきだ。それを愛すべきだ。

吉野の苦悩に歪んだ表情が思い浮かぶ。吉野とも語り合っておくべきだった。望むものを捨てろ。意味のないことに生きることを怖れるな。そうすれば生きることに煩悶はない。

やっとベッドにもぐりこむことができた。シーツも替えられていない。なま臭い惨めな部屋だ。服のまま横になる。なかなか眠れそうにない。だがなぜか安らかな気持ちだ。

今こそここで吉野の原稿を読むべきだった。小説であろうと告白であろうと三十年前の遺書であろうと沢木はすべてを受け入れることが出来そうだった。吉野の苦悩を全部俺が引き受けてやる。お前が苦しみながら生きてきたこと、その様を決して忘れはしない俺がいる。安心して現実の世界から姿を消してくれ。汚い安宿の暗い電球のもとでこそこれは読むにふさわしい。

吉野の原稿は三十枚ほどの短いものだった。原稿に彼の名前はない。タイトルは「小説」とだけ書かれている。沢木はその「小説」に衝撃を受けたが、それはすぐに消えてもの悲しさが残った。彼の苦悩を感じると、それは吉野へのいとおしさに変わって行つた。おそらくこれは四十年も前のことだ。いやそれ以上だろう。すべてが真実ではないだろうが、吉野がこれを書かざるを得ない気持ちになつて、また野本へ預けた気持ちは理解できた。原稿用紙は変色して読めない箇所もあつた。まだ三十歳前の吉野のペンは若々しくぎこちなかつた。沢木は一度読み通してから、もう一度気になるところを繰り返して読んだ。最初は彼がデモで逮捕されたところから始まっていた。

「まさかお前が逮捕されるとは思つてみなかつたらう。あの日デモの帰りに僕を取り押さえた私服警官がにやりと笑いながら言った。僕はその意味がわからなかつた。まさに思つてもみないことだったので、それほどの緊迫感はない。しかしその言葉は拘留、保釈、裁判という時間の中で次第に重く僕の頭上にのしかかってくるようになった。一つには僕の数年間の活動に対して無視するという限りない侮蔑の言葉である。僕の行動の一つ一つを見透かしてマークして適当なころを見計らつて逮捕する。理由はなんだってよい、おれたちは深刻ぶつたお前たちに因縁をつけて

くだらないゲームを楽しんでいるのさ。歳は同じくらいなのに、妙に老けた私服の狡猾な眼。思いつくたびに僕は怒りよりも激しい恥辱に耐えられなかった。そうだ、まさに僕は逮捕されると思ってもみなかった。凶器準備集合罪、傷害罪、公務執行妨害罪、あまりにも大げさな罪名だった。裁判が公正なものだったら何の時間もかけずに僕の無罪は証明されるはずだった。

逮捕される三か月前のK大学での集会在僕の罪の現場であるということだった。裁判が始まって証拠写真が出され、何かを投げている見知らぬ男が僕だということだった。それが事実であるかどうかは権力にとつてはどうでもいいことだった。僕はその時いまままで何に向かって闘争を続けてきたかということを知った。ふとかすかな恐怖が背中を掠めるのを覚えた。絶望へ滑り落ちていく一步なのか。権力は有無を言わず対象を抹殺しようとする。無力なものに無意味な仕草を強要する。愚劣な巨大な力を持つて僕を一片の小さな愚劣の塊にしようとする。」

未決囚の日々の生活、仲間の励ましの面会を少しうるさく思い始めてきたこと、次第に闘争への彼の力が必要とされなくなり、保釈後は自然に身を引いて行ったこと、が書かれている。内ゲバ、R派からの攻撃を怖れて身を隠し精神的にも追い詰められた不安な日々も続けられている。裁

判の日は出廷しなければならなかったが、それ以外では表に出ずに彼は炭鉱町の「病院で働いている。アルコール中毒患者や自立の出来ない無気力な人たちばかりだった。病院は病気を治すところではなく、隠し捨ててしまおうとする家族のためにあるようなものだった。退院するのはわずかで大半はすぐに戻ってきた。」病院はかつての親友Mの父の病院だった。その親友は大学二年の時退学処分を受けて行方不明になり自殺した。昔のことだ。

吉野の文章には子供の頃のことを語られている。彼の父親は炭鉱の会社の電気技師だった。人望が厚く会社からも労働者側からも信頼を得ていた。また技術力のため「病院の営繕を手伝うことも多かった」ので、院長とも個人的に親交が深かった。その父が事故で死んだのは彼がまだ小学校の時だった。途方に暮れた家族を院長が引き取ってくれた。母が女中として離れの一間に住むことが出来た。利発な彼を院長は自分の子供の学友にしたかったのだ。彼らは兄弟のように育った。坊ちゃん、坊ちゃんと大切にされるMの前で、幼い吉野は自分の位置はちゃんとわきまえていた。Mはそれをごく自然として振る舞った。長髪の美少年のMと丸坊主の吉野だった。二人はじゃれあうようにいつも一緒だった。次第にMが指示を出し吉野がそれに従うようになっていったのは仕方がないことだった。

ある夏のことだ。淡々と書かれている。あまり暑いので二人は水風呂に入って遊んでいた。自分の性器を見せ合い、お互いに触ったりしていた。そのうちにMが面白いことをしようと、吉野を妹の部屋に誘った。広い家には誰もいない。部屋でMは引出しをあげて妹の下着や洋服を出して吉野に触らせた。彼は揉んだり引き延ばしたりしながら不思議な気持ちになった。Mはもつとやれと勧めながら吉野に体を押し付けた。がそれ以上進まなかった。いきなり吉野は射精したのだった。

中学高校になると成績に差が出た。吉野の成績は県内でも上位にいた。院長はそれも喜んだ。息子と一緒に医学部に合格してくれたら学費は任せてくれと言った。吉野は毎晩Mの部屋へ通って勉強し問題を解いた。吉野はMに教えるために結局二度その問題を解いた。Mの母は嬉しそうに夜食を運んできた。妹の由紀子が一緒に夜食をとることもあった。由紀子はお兄ちゃん、お兄ちゃん、とMを特に慕っていた。吉野にはよそよそしい態度でしか接しなかった。Mは革靴で学校に通う背の高い長髪の似合う生徒だった。学校では吉野はいつもMに着いて回った。腰巾着と悪口を言われたが悪い気はしなかった。夜と昼とは支配権が逆だった。

「二人でそろって医学部に合格した祝いの席で、将来二

人でこの病院をやってくれたらなと院長が言った時、僕はふと空々しさを覚えた。酒気を帯びた院長の赤ら顔に僕は憎しみに似たものを感じ始めた。将来ずっと彼らの従者として僕を困らせて行こうというのだろうか。

入学と同時に僕たちはふと疎遠になった。僕は安い下宿に住み酒と麻雀を覚え怠惰の味を知った。彼は磨き上げた車で通学した。彼は昔ほど僕を必要とはしなかった。それでも時折り二人で過ごすこともあった。ある時彼が初めて女を経験したと言った時、僕は賞賛の言葉を送りながら、彼のセーターの下の肩のふつくらとした膨らみに激しく嫉妬した。

休みにも僕は郷里に帰らなかった。母は僕の入学を見ないまま亡くなっていた。僕はアルバイトで稼ぎながら収入の大半を酒に変えてしまっていた。約束通りに院長は学費を出してくれたがそれ以上頼るべきではなかった。戻って来るたびにMは女の経験を語った。父の目を盗んで空いた病室の鉄製のベッドに看護婦を抑えつける話はいつも僕を興奮させた。ちよつと優しい声をかけるとすぐに夢中になつてくる。僕は見覚えのある看護婦の姿態をどれほど悲しい気持ちで思い浮かべたことだろう。時に僕はその看護婦が由紀子の顔をしている気がして嫌な気持ちになった。そんなことはありえないはずだった。僕は必死の気持ちでそれを追い払った。嫉妬だったのだろうか。ただ由紀子を

犯し奪い取る想像がふと浮かぶと、それは僕を力づけてくれた。彼女を愛し始めていたのだろうか。

由紀子はたびたび出てきた。兄の部屋を掃除し食事を作った。仲がいいのを見せてつけるように僕も呼ばれた。ある時など酒を飲み過ぎて部屋でそのまま眠ったことがあった。咽喉が渴いて目を覚ますと、Mを間中にして向こう側に由紀子も眠っていた。昔の悪戯が思い出されて僕は興奮した。そして布団の中の由紀子の肉体を想像して、兄妹として共通のものを持つているMを憎んだ。

僕の生活は苦しかった。Mに金を借りるしかなかった。前の借金の残ったまま、ある時次の借金を頼むと彼は露骨に嫌な表情をした。それから度々僕は返す意思もなく金をせびるようになった。彼は僕を避けるようになった。しかし僕は止めなかった。ある期末、僕は二つの科目を落とし、追試を受けることになった。Mは及第していた。僕がテストで彼に負けたのははじめてだった。いつものように金を借りに行つた僕に、彼は誇らしげに要求よりも多く出した。それは僕らの友情の終わりだった。

Mの自殺の原因の大半を僕が占めているのは確実だった。誰もそれを知らない。誰も理解できないだろう。永遠に闇の中に閉じ込めておくのだ。しかしそれを思い出すたびに僕の胸は締め付けられる。胸が挟られるような恥ずかしさに責め苛まれる。その当時、僕も自殺しようと思うほど苦

しみ、その恐怖にも捉われていた。しかしそれももう昔のことだ。」

僕は今、運動から身を引いてT病院で働いている。何故あれほど激しい運動に没頭していたのか、自分に問うこともない。今はただ患者への深い思いやりについて書かれているだけだ。

「患者の中に、小学生や中学生が何人もいて僕はいつも痛ましい思いに胸をふさがれた。駆け落ちした母親に捨てられた少女は愛くるしい眼をいっぱいに広げていたが、決して泣こうとも口を開こうともしなかった。アル中の父を持つ少年は母親への虐待を見かねて、ある日突然自分の体が輝きだして、不幸な家庭を救う救世主になったと宣言した。彼はいつも病室で毛布をマントのようにはおり神の言葉を喋った。また入院してから一言もしやべらなかつた少女は窓から飛び降りた。

一人一人の患者の顔を思い浮かべると僕はたまらないほどの懐かしさに捉われる。かれらに限りない愛情を持っているかと問われればそうだと答える。しかしそのために自分の全生涯と生命を掛けて身を犠牲にすることが出来るかという問いには答えられない。」

大したことではないと最初は高をくくっていたが、裁判の結果がだんだんと気になってくる。有罪、刑の執行、医道審議会による医師免許剥奪、もしかしたらという経過を怖れるようになる。

「闘争に没頭していた頃、疲れて着の身着のままで眠りをむさぼった日々、あれほど軽薄に思われた医者という職業になぜこれほど固執するのか。不名誉を恐れるのか。医者以外に僕は何もできないのか。僕は反問し意気地なさを悔やみ苛立ちの日々を送った。僕はこっそり図書館へ行き医道審議会の処分の記録を調べた。惨めだった。静まり返った中でページを繰る。隅の方でささやく声をする。まさかお前が、まさかお前が逮捕されるとは。だれかが耳元でからかいだすようだ。

裁判が終わりさえすれば、無事終わりさえすれば、何度この言葉を繰り返し呪文のようにまた祈りのように繰り返して呟いたことだろう。有罪、頭上に打ち下ろされる鉄槌のようなその瞬間は、僕の全身をどのように打ちのめすのか。狂気に駆られたように僕は叫ぶか。下半身が崩壊していくようにその場に崩れ落ちるのか。打ちひしがれたまま二度と立ち上がれなくなるのか。

反面、僕は無意識のうちにその瞬間を期待していたようでもある。その瞬間はむしろめくるめくような快感となっ

て襲って来て、一種の至福感として僕を包み込むのではないか。そのような想念が眠りの浅い明け方訪れて来るようになった。原色の形のない映像が不規則に動き始める。誰かの忍び笑いが聴こえてくる。誰かをこの手で苦しめた
一

僕は神経が相当にすり減ってきているのを感じる。

「患者を診察するとき、自分の行為ひとつで彼らを破滅させることが出来るとふと考え、不安になることがあった。社会生活へ復帰しようとする患者の努力の中に、さらに深い破滅へ身をなげうつていこうという無意識の傾向があることを僕は感じるがあった。彼らをそれ故に病人とよぶのか。病人だから顕著にその意志が表現されるのか。彼らを僕自身の手で破滅させる。二度と立ち上がれない言葉を投げかける。そんな誘惑と知らないうちに戦っている自分を感じて僕は驚いた。その上その誘惑に打ち負かされれば、この上ない至福感に陥るのではないかと思うと、僕は恐怖に捉われて暗然とした。

僕は医者としての人格欠落者か。しかし本気でそのようなことを考えているのではないことは自分でわかっていた。人間をそれほど冒流できるわけではない。他人を破滅させるという妄想の快感の中に、僕は自分の破滅への衝動を秘かに感じ取っていたのだ。己自身がいつか一瞬のうちに暗黒

の淵に身を躍らせる衝動を待ち望み怖れてもいたのだ。深い苦悩は存在しないだろう。何も見ず何も聞かず何も語らず、ある時狂気に駆られて深淵を落ちていくのがいいのだ。」

彼は数年そこで仕事をする。鬱積した怒りや不安を払しよくするため彼は修業僧のような生活を送る。専門書を読み、古今の詩を読み、音楽に日々を費やし禁欲を科す。

特別病室を部屋兼書斎にして病院食で過ごす。すべての患者の顔が頭の内外で渦を巻いて語りかける。渦に巻き込まれ倒されないように自分をしっかりと見つめなければならぬ。区別のつかない日々は驚くほど速く流れる。外出はほとんどしない。長い苦悩が書かれている。そしてある時、私服警官が訪ねてくる。

「襟の高い灰色のコートに身を包み烏打帽を深々とかぶった男を見て僕ははっと身構えた。おまえが逮捕されるとは思ってもみなかっただろう。まさかお前が。その声でなんと多くの眠りを破られてきたことだろう。まさにあの時の男だった。僕は恐怖よりも背中を冷たいものでそっと撫でられたような虚脱感に捉われた。」

そのなれなれしさに激しい嫌悪感を覚えるがどうしよう

もない。

「やあ先生、お久しぶりですな。ここにおられたのですか。真面目なお勤めご苦労様です。革命運動から身を引かれて、静かにお過ごしですか。もう何年になりますか。今日は特別の要件があるわけではないので。先生が連中の資金源であることが確認できればいいですよ。それと何か新しい動きがあれば、またその時は来ます。あ、R派はもう来ないでしょう。この前奴らと話をしたのですが、先生はもう忘れられています。大丈夫です。あ、K教授、先生の学生時代の教授ですよ、あの方にも久しぶりに会ってきました。大学紛争も一段落した、懐かしいとも言っておられましたよ。いや、懐かしいと言いながら、嫌な気持ち、屈辱を思い出したようだったかな。先生の学生時代の事もよくお話になりました。面白いお話でした。いや、先生ご心配なく、こんなことは誰にも言いません。先生と私だけの秘密です。先生の友人、誰でしたかな、あの自殺した友人の方。先生と特に親しかったとか。残念でしたね。」

そもその大学紛争はパリのカルテラタンで学生が質問の自由をと叫んで始まった。日本では医学部のインターン制度廃止反対に端を発したものだ。過去が蘇る。

「僕はインターンを終えたばかりだった。学生のリーダーの一人が教授面会の際、教授の肩を押しそれが暴行として報告され、その理由で処分を受けてから紛争は混乱し始めた。医学部長である精神病理学のK主任教授は護衛に守られて登校するようになった。毎日のように医局では討議が行われた。学生の意見をいかにも理解した様な助教の愛想いはいかえって反発を受けた。最初自分の長い下積みのみ思いで学生を説得しようとした教授は次第に何も話そうしなくなり薄笑いを浮かべているだけになった。彼が口を開かない限り収束への糸口はなかった。

教授の絶対的な権力と官僚機構の中で学問の自由な発露はあり得ない。現在の大学でこれ以上学ぶものはない。青年医師連盟と無給医局員組合は全病棟の自主管理に踏み切った。僕は連盟の指示を受けて、医学部共通医局と自主講座の場所を確保するため数人の仲間と医学部図書館を占拠した。

教授への個人攻撃のピラが撒かれた。まず彼が助教の頃おこなったロボトミー実験がとりあげられ彼の断罪を迫った。教授は病氣といつて自宅に引きこもったままだった。また助教時代の論文が盗用論文だという問題も起こった。続いてその前年に下された友人のMの退学を強引に進めたのもその教授であることが問題になった。

大学は何度も機動隊を導入した。病棟の自主管理は二ヶ

月で排除され、教授派の医局員で占められた。十数人で占拠していた図書館はいつも簡単に奪還された。僕は殴打され長い間寝ていた。紛争は収まりつつあった。医局員は次々に大学を出て行った。僕は肋骨のひびの痛みにならずに布団の中で、教授よりの手紙を受け取った。彼は僕が他人の過去をあばいて破滅させようとするとは非難していた。君がこれ以上大学での運動を続けるならば、自分もまた発表しなければならぬことがあるという趣旨だった。それはMの自殺の原因を指していた。教授の脅迫している原因は確かに僕にあった。しかし誰も知らないはずだった。彼はいつどこで知ったのか。」

沢木は最後のページを一気に読んだ。全身は虚脱状態でありながら、動悸だけは激しく鳴っていた。もうこのページを再び開くことはないだろう。これは彼への同情か、いや違う。彼への限らないとおしさだ。沢木はインクの消えていきそうな、そして風化して粉末になって飛び散りそうな原稿用紙の上に吉野の幻影を見て、それを抱きしめたくなった。この世の中で君を理解し受け止め抱きしめるのは俺だけだ。これがフィクションなのか現実の話なのかそれとも告白なのかわからない。どうであろうと、とにかく読むのは俺一人だ、他には決して出さないと沢木は固く決心した。

「めくるめくような夏の一瞬の記憶がよみがえる。白熱した太陽の光線に満ちたあたりの情景を僕はまったく覚えていない。しかし現実の僕は数日前から夏風邪をひいて寝込んでいた。冷静だとも思っていた。寒くてどうしようもないのに全身からは絶えず汗が噴き出していた。数日前の解剖の学生実習が浮かんでくる。検体は干からびた老女のような残滓だった。快感が貫いたことも、苦痛に曲がり歪んだこともあったのだ。

朝めざめた時に僕はふとそうすることを思いついたのだ。朝の三十分しか陽の射さない部屋だったがその日は久しぶりに朝陽を顔に浴びて目を覚ました。気分はよかった。急に何とも言えない幸福感が全身に満ちてきた。灼熱の太陽の下の輝く海が脳裏にひらめいた。午後は泳ぎに出かけよう。Mを誘って行こう。僕は立ち上がった。急に眼がくらんだのを覚えている。あとはまったく消えてしまった。

どこかの薄暗い部屋でタイプライターを打っている自分の姿を僕は見ている。ローマ字で密告書を作っている。まぎれもなく僕自身だ。しかし夢の映像のようだ。僕はそれを廊下に貼るかK教授の部屋に投げ込むか郵送するか考える。それがすんだら海水浴だ。どこまで泳いで行っても海

底の砂地が見える海。太陽の匂いに満ちた愛撫するような風が吹く。

それは夏休みを間近に控えた解剖学の実習の時だった。学生たちも解剖には慣れてきつつあった。男女の死体が解剖台の上で少しずつ剥されていく。助手が席を外した時だった。Mが素早く男の一部を切り取って、女の下半身に差し込もうとする。卑猥な忍び笑いが起こるが、ふとそれは途絶える。敬虔なものを冒した畏れと後悔で誰もが口をつむぐ。気の弱い助手が真っ青な顔でいつの間にか僕らの後ろに立っている。叱ることも出来ず彼は呆然としているが、ふと気づいたように部屋を出ていく。教授に告げに行っただろうか。僕らはそしらぬ顔でその場を離れる。

Mの行為を見ていたものは僕を含めて五人だった。教授はひどく怒りクラス全員を教室に閉じ込めて説教した。このような行為をする者は医者としての人格を持っていない。教授会に報告され行為者の処分について討議された。しかし行為者が誰であるか、分からなかった。決して口を割る者はいなかった。Mは普段と変わらずに振る舞っていた。僕ら五人は彼の不安と反省を感じることはできた。夏休みがはじまり、それが終わるころには誰もが忘れてしまうさ、僕らはそう思い込もうとしていた。」

ある日沢木は吉野の診察室に入った。この三十五年で五、

六回しか入ったことはない。あとは吉野に挨拶をするときに覗いたくらい診察室だった。神聖な仕事場をかかわりのない自分が馴れ馴れしく出入りするのはどうかと沢木は遠慮していた。吉野もそれを理解していた。

由紀子に相談を受けてからも、すぐには入る気にはなれなかった。なにか衝撃的な根拠が見つかるのではないかとの怖さがあった。だがいつまでもそのままでは済まされない。

エアコンを点けたがそれは冷房のままだった。足元と頭上から冷気が襲ってきたが、暖房に切り替えなかった。埃の流れがひんやり首筋を撫でた。いつ始めたのかたばこが匂う。

八畳にも満たない部屋で窓は摺りガラスで白く外は見えない。溜まった埃のためかもしれない。隙間風が木の窓枠から流れ込んでくる。患者と医者が真向かいに座って話をする小さなテーブルが入り口近くにあり、椅子は患者用の方が革張りで立派である。乱雑に散らばっている書類やまとまりなく詰め込まれた本棚の本。壁には患者たちの作品の絵や書道が掛けてある。その隅にテーブルトップのパソコンと小さなステレオセットと沢山のCDがある。特に記憶とは変わってはいない。パソコンは当然キーボードで保護されて覗くことはできない。ここ数年は夜遅くまでこの部屋で過ごしていたと事務員から聞いたことがある。うす

暗い蛍光灯をつける。

哀しみか苦しみかどんな感情の流れが彼の心に渦巻いていたのか。どんな切ない力でそれらを抑えつけようとしていたのか。あるいはもう諦めてその激流に身をゆだねていたのだろうか。彼は逃げたのだろうか、それともさらなる流れに飛び込んでいったのか。沢木はまったく今までそれらを感じなかったことを恥じたが、また何の相談もしてくれなかった吉野を恨めしく思った。誰かほかに相談するものがいたとは思えない。今彼を抱きしめてやりたい。愚かな意味のない雑事に次々に纏わりつかれながら、それに苦しめられながら力つきてただ遁走していったのか。やるせなさが沢木の思考を止めた。そこにどれくらいの時間いたか覚えてはいない。

沢木も自分の三十五年間を考えてみる。世の中は様々に変わった。日本経済の成長がありバブル景気があり崩壊があり、一晩でどん底に落ちる人がいた。日常に残酷な事件があり自然災害が起こり、原子力発電所が崩壊した。苦しみと悲しみを抱えて生きねばならない人々が増えた。外国では戦争がありテロがあり、泣きわめく人々の映像に触れない日はなかった。沢木はその都度同情し心を痛めた。しかし自分では何もしなかった。何もできなかった。そして忘れた。自分に残ったものは本当に何も無い。吉野のような煩悶もない。その間、自分が熱中していたのは秘かに自

室で浸るヴィヨンの詩だけだ。美しく哀しいバラードを暗唱する。暴力と放浪に憧れる。闇の中の感動を想像する。本気でそれらを追っかけるのではなく、ただ夢見るだけだった。

また大学の授業はたいして重荷にはならなかったが、面白くはなかった。それを何という長い間続けてきたのだろう。勉強もせず物覚えも悪い女学生へ一時間も喋ると、学生が見えなくなる。空虚な空間へ言葉ではない俺の音だけが漂って消えて行く。それだけの三十五年だった。同僚の教師とは誰と何回喋ったか記憶にもない。

明日の十時に理事長に呼ばれている。用件は分かっている。年が明ければ自分は七十歳になる。

沢木はもう吉野は帰ってこないと確信していた。由紀子がいんなな事情を知っていることは間違いない。二人の間には誰も知ることのできないことがあったのだ。愛か憎しみか、あるいはそれでも離れることのできない無関心か。冷たい気流を間にしても引き付けあつたものが。それらが氷解したのか、それとも吉野だけが一散に闇の彼方へ遁走していったのか。なぜか。しかし由紀子がそれを語ることはないだろう。感情を押し殺して沈黙を守る悲痛な表情が浮かぶ。

沢木はかつて吉野の姿がそこにあつた椅子に座つてみた。

長い日々の中で、彼は心の奥に重い鉛の棘を抱えてそれに耐えてきたのだ。今彼が憐れでいとおしい。そしてそれに従つてついてきた由紀子の苦しみがさらに沢木の胸を打つ。

ステレオ装置のスイッチを入れてみる。沢木は当然そこにあるCDを見つけ、ためらわずにかける。「トッカータとフーガ」だ。出だしの音がいきなり冷気を切り裂くように鳴り響いた時、沢木はそのあまりの鋭さにあわててスイッチを切った。切り裂かれた冷気の間からいきなり漆黒が出現した。灼光のようでもあつたが一瞬に消えた。動悸が高鳴った。懐かしさはなかった。そしてまた気分が沈んだ。

その時沢木は自分がなぜそう思ったのかわからなかった。由紀子を抱きたい、かつての美しい由紀子ではなく、今の朽木のようなやつれた由紀子を。彼女は決して逆らわないだろう。うなじにかかる乱れた髪、萎れていく乳房、もう鍵盤の上で踊ることのない木の枝のような指。そして形の崩れつつある腰。それらを力尽きるまで愛撫したい。かつての美しさを秘めた醜い由紀子がさらにいとおしい。長い間由紀子に求めて来たのはそれだったのだろうか。彼女の歪んだ顔は苦痛のためか、悲しみのためか、快感なのか。玄関の戸が開く音がする。由紀子が来たのだ、沢木は身構えるが、それが幻聴だとすぐに気付く。彼女が来るはずはない。しかし彼はじっと待っている。